騎歌盡

全

三浦

911-1
28

04

癸丑新鐫

一讀歌書

明倫館藏梓

知智乃實乃。父能美許等。波播蘇葉乃。母能美己等。於保呂可爾。情盡而。念良牟。其子奈禮夜母。丈夫夜。無奈之久可在。梓弓。須恵布理於許

之投矢毛知。千尋射和
多之。劔刀。許思爾等理
波伎。安之比奇能。八峯
布美越。左之麻久流。情
不障。後代乃可多利都
具倍久名乎多都倍志

母

反歌

丈夫者名乎之立倍之
後代爾聞継人毛可多
里都具我祢

或謂予盡自敍此書乃竊

取大伴氏歌以代題詞蓋
欲童蒙拔此奏先必誦此
歌去爾 榊陰加藤熙識

一騎歌盡

一 楠公の教へにいはく
義をよく守て死を忘れ
大事に臨み動かぬぞ
うつろひ易き心もて
忠義の人を傷ひく
盛んに在らん人であれ

身正直に邪慾なく
上を敬して下をあなく
是ぞ最上の武士と云ぞ
僞りて多く慾ふかく
己を愚らに血氣のみ
能くかへりみて戒めよ

夫武の夫の心得は
神兵さかる其數の
我大王に順従せぬ
君に仇なす敵あらば
守るは道の本ぞかし
籠手臑當や太刀草鞋
又七具とも申はなり

先第一に名ゆしはふ
我そと思へかしとくも
醜つ夷しら打拂へ
討平らげて其國成
夫と六具とは胴冑と
此外精を加へて挽く
初て鎧を著るなれ

軍さ神をも祭るべし
三に小袖よ四に袴
七つ佩立八つ決拾
次に上帯次に太刀
次に鼻紙藥りなり
腰に納めて出立と
下上左右と順に着て

一に肌帯二に下着
五つは脛巾六つは臑
九つは籠手十鎧
次に頬當甲となり
次に扇子お采配を
凡著具の大法は
又脱く時は上下右

左りやく脱ぐが大法ぞ
又鈎り具足捘掛や
便利様々傳へあり
必ず得物を携へよ
半被道服陣羽織
背旗幟半袖印
烏帽子鉢巻頭巾等
時に取ての装ひぞ
甲の品も百通り
三つ乳四つ乳の盛の緒
兼ての習ひ心得よ
又小具足と云事ハ
産小手計りさへなり共
身甲のみをいふ説もあり

太刀の長さハ並の人
二尺三寸とぞ定めたり
又寸法を腕にあてゝ
較べて佩る法もあり
鎗ハ直槍に三寸穂
弓ハ半弓矢ハ矢籠に
筒をバ肩にかつぐくに
掛て身軽を要とぞせし
武者の草鞋ハ蓑荷して
作るもよしぞ椶櫚の毛や
木綿に葉や鼻緒をぞ
紺の麻紵を用ゆべし
陣中に持つ品品ぞ
緒縄澁紙細引よ

油紙やうに陣莚ろ氣付毒解し疵薬も
血止の薬も薫陸や燧付木に艾さへ有り
尚其外に石筆や磁石水呑遠目鏡
絲針剪刀櫛鑷干飯梅干焼飯よく
又人参に梅干を煉交せ乾して持るべし
是こそ人馬息合の名方とこそ云ぞかし
尚手巾も三尺乃布よく鞘に搦み置け

弓矢其外物の具ハ一二三と札を付け
急ぎの時に誤るな米ハ一人に一升ぞ
味噌ハ一人に三十目是一日の兵粮ぞ
夜詰後詰に殿りや押前陣取備立
屯砦てに小屋掛も野陣小荷駄の用意迄
夫々下知に従つべく手分け手配も心得べく
軍さ詞や合ことば總て軍令忘るゝな

夫武者押しの大法を
三つに進み四つに驅け
再び聞かば折鋪きて
身終に囬し引くとよし
旗の動きや烽火迫
旗は持旗先旗に
かため様との習有り

太鼓二つは地足ゆく
金鉦聞かば立止り
金鼓打交ぜ聞なくば
其外貝の吹やうや
兼て繰練の有る事ぞ
又役旗の立様に
只夜軍は挑灯を

旗の代りに用ゆなり
人数を纏に纏とて
凡長柄は突よりも
川を渡すはやりて筏
又やり柵の習有り
兵射軍馬に拙きぞ
陣中にての慎みぞ

馬に従ふ馬標し
皆大将の印しなれば
扣き伏せるが働きぞ
備をかくさむやりもやね
禮射馬場乗計りにして
第一武士の不覺也
喧嘩口論第一ぞ

戰場にての軍礼を
若し常の日ハ神の方
尚其上ハ取て髪の
君前にても同様なり
初陣ならバ真先に
心の血祭て早せよ
互に言を通し置け

神前なら共下馬する所
其片鐙を外し乗るを
上に手を付き拝すべし
總て弓馬の故實なり
雜兵なりとも打取て
先拂下に付ならバ
名乗る習ひも數多あり

又軍功の數々ハ
首ハ槍下一二番
場中の勝負獨りして
功名とて云ならし
變に應ずる働きを
總て頭らの首取らば
首ハ塩手に結び付よ

城ハ一番二番乗
槍ハ一番二番槍
殿をするや此五段
其外虜を分捕て
時に取ての手柄なり
釆配等を添て置け
多く取たるハ鼻を掻き

又ハ耳のみ切るもよし
捨たる方ハ首を向ず
總て兵器ニ手抜せず
首實撿の式法を
其切口を膝ニまへ
前ニ向るが禮ぞかし
三度撫るを化粧とす

御前ニ置が古法也
縁を放して居るなり
又大將の首ならバ
魂祭をするが禮ぞかし
又片手綱樣々と
當物等や物音や
又ハ山坂九折坂

首を捨れば一禮し
太刀の血をバよく拭へ
眞田の與市と心得よ
酒ニて洗ひ能清め
首の右を大將の
首の左りニ手ぞ當て
其時弓が太刀ニても

臺ニ載るハ折敷の
三十三の首とぞ云
塚を築ひて石を建
總て手綱を腰手綱
業ハ兼ての嗜みぞ
又ハ火水や遠路や
又ハ嵐しや雪霜や

共に試し慣しぬれば
太刀を枕や雨の日ハ
づぶぬれとさへ云ぞかし
丈の低きも乗易く
一爪二心ぞ要とせよ
目を経て大中も劣るあり
心ぞ付て飼ひ給へ

花ぞ主しの旅寐にハ
大将士卒諸共に
馬を撰むの大凡なるぞ
長けの高さハ水によし
名馬なら共悪くせバ
馬ハ将武士の足なれど
赫白の馬ハ朝廷にて

御召しあれどハ憚るぞ
不吉也迚世に嫌ふ
目立し毛色も悪き也
程よき肝の馬ぞよき
和る体も見苦しく
驅て出るハ勇ましき
能く塩を塗て梅乾と

二毛の馬も其詞ハ
若馬なれど危くて
手に勝れたる馬もあし
馬の進むを物前に
進まぬ馬に鞭打て
馬の舌にも朝毎に
轡の嘴みに付てよし

五八霜を耳掻きに
十日廿日ハ豆いらバ
口を洗ひて輪を乗て
轡と泥障ハ外しおけ
鞭ゆて押へ渡すべし
其勢ひに乗り入るを
向ふの上げ場見定よ

一と七つ喰せぬべし
馬にて川を渡すなら
其後水に乗て入るとも
頭を高く揚るなら
川の前より駈を出し
先打渡す其前に
馬の草頭に水乗らバ

銜ハの水付取て下りて
曲尺に渡して誤るな
若大勢にて渡るなら
下らハ弓筈を執すべし
弱きハ下手に並よかし
上ハ下ハの坂ともに
辿も険しき山なりバ

自分も游き引渡せ
流を渡るに渡すべし
肩ハ並て手を組て
強き馬ハ上手に
是宇治川の古法なり
千鳥にかけて歩ませて
先組をつけ逐落し

其身も縄より下りてよし
鵯越を法とせよ
馬の舌をも結ふべし
引違へて乗るもよし
馬をは堅く係ぐべし
目標し心付ておけ
總て馬をは早く乗れ

鹿さへ越せは馬もこえ
竊かに忍び行く時は
又は其銜右左り
先陣中に折敷ては
馬込ならは馬記し
使の武者の心得は
百里の道を一時に

乗らんとならは十町や
輪の乗る事そ秘傳なる
輪を乗りて矢ら見るときは
又振りて向きて敵を見よ
先駆け早く乗りを詰めよ
急き下馬して首取な
心許すな山櫻ら

又十五町行く毎に
敵の様子を見るなるそ
細道ならは騎廻り
馬より徒歩を討るならは
馬の上より仕伏せなそ
能々止めよ折得ても
誘ふ嵐しも有りとこそ

馬上の敵と戦ふて
馬上と馬上の太刀打ハ
次ニ手綱の喉もよし
相應の敵一人ニ
目當なくしくて養気ま
若後ろより打かゝらハ
左りニ廻りて太刀下ニ捨

手綱をも切れ足も薙げ
先草一ニ目を拂へ
敵を討んとするならバ
能目を付ケて戦ひて
弓手ニ受るか勝ぞかし
右へ外して振廻せ
放火の烟ある咽なすハ

地ニ伏して息を突け
口ニくはへて咽苦しそ
緒を付けさげて持ぞ吉
先少し宛飲給へ
先赤土を少し飲て
凍ゆる時ハ焼飯を
又ハ胡椒を煎じ置よ

又一方ハ生太根
水を持ニハ竹筒ニ
渇しくて水を飲時ハ
飢たる後ニ食するなら
又ハ粥をも啜るよし
包んて腹ニ當てよし
手足ニ塗るも飲むもよし

又恩地家の家傳にハ
物見と物見と出合ならハ
さながら勝負を望む其
埋覆あるを見掛ても
敵の強弱進退を
二に内盛見へもしく
四に備の色濁り

蛇蝎を乾して飲もあり
途を違ひて通るべし
外す残作候の禮と定き
知らぬ体にて行過ぐ
一に備の盖低く
三に指物前に伏し
黒みて見ゆるハ進む也

内盛見へ指物も
高く清きハ弱兵そ
先坪割するに人を見て
總て高見ハ多く見へ
川の深さハ繩をはけ
田の深みをも見するらハ
田の面ハ深田と心得よ

又浮き立て備へかゝき
敵の多少を積るにハ
二つに折りて割つて見よ
低きハ小勢に見ゆると義
礫を付きて投げて見よ
金氣の浮くをあせたぬ
若過たるを義仲也

道に迷ふて問ふならハ
知つたる方を先聞きて

信偽を試み後に問へ
若し誤らバ楚の項羽

扨夜軍の第一ハ
總て目當を忘るなと

掛引と様ハ大事なり
船軍さぶハ身軽にて

働きよきを肝として
熊手投鎌用意せよ

毋夜佩立も不用なり
弓返杯忌むべし

小舟ハ座して戰ひて
立ハ傾く物ぞかし

棹に櫓櫂に帆の仕懸
風の方角雲の色

日和の見方潮時や
水馬水練第一ぞ

兼て追留有ならバ
長追すれハ越度なり

己々備ひと持場を
一足たりと共外すれな

主人と頭らに別れてハ
功名有共不覚なれ

柵越し壁越し塀越ハ
先ハ槍にハならぬなり

時刻外さの首持て
病首なと云ぞかし

備への事ハ右左に前陣後陣旗本も
四武の備を本として千變萬化ニ易る共
本を外さぬ工夫せよ總て野山や森林し
敵と思ふて油斷するな油斷を敵やと心得よ
奇兵游軍伏兵ハ皆不意を打つ法ぞかし
朝掛夜掛夕懸けや時ニ定は有るべきや
兼て武藝ハ嗜みて得手たる業ハ能究め

尚其上ニ孫呉司馬六韜三畧尉繚子
凡そ和漢の經籍ニ心を潜む士は
真の武士とハ言ぞかし上べのみニて強く見へ
我慢の腕立好めるハ真との勇士ニ非るぞ
是武の夫の掟てぞと明將達の誡めは
寐ても覺ても忘れ給ふな

右ハ楠公の兵法を本として諸流の正説を加へ

且其諷誦に便ならむ事を欲し今様の句法に擬し是を我家の小童に授く或ハ能兄唱弟應晨夕に對誦し口に上り心に悟らバ弓矢取る身の高見山踏分け上る麓の道の道志るべにもあらむかやと云尓

嘉永壬子正月五日　常陸後學加藤熈識

附歌一篇

偖又末の世やすらく
筒の火技の箭と玉と
火縄用ひぬ働きも
陸戰水戰事易り
夫を捨るも時ならば
遠の夷等負氣なく
巧み出せし夷すらが
火打仕掛や雷火藥で
山戰野戰の品變り
日に異に開く世となれば
増して海原隔てある
大艦小艦火輪船

船のみならず火車もて
百里千里も一時に
又大虚を翔り行く
風船氣毬など云て
争ひ戰ふ業あれば
彼が巧みに陷入るな
只火や船の巧みにて

風のまにまに火勢もて
乗來る異き業もあり
天之鳥船なりすとも
巧みに巧を重ねつゝ
只己がのを守り居て
是又愚かと思ふべし
便りよきのみ頼つて

神代よりして弓太刀の
中昔より筒の火を
大和魂いかにせむ
性と異なる人なれど
戰ふわざは本意なれど
教の旨もあればこそ
神の道をし尊みて

己が長技を忘れなぞ
臆病藝や賤みし
又水にもすむ魚なるぞ
船上海上水底に
楠公の宣ひし
斯る理なり魂幸ふ
初學よりして踏な違ひそ

壬戌六月十二日於櫻田邸之有備館
榊陰煕再識